▲　満開のつつじ　（５月７日・境内にて）

慧光

金光寺寺報
第１４３号
発行所　金光寺
宮崎県西臼杵郡
五ヶ瀬町大字鞍岡
５９２７番地
℡０９８２
８３－２３３８

今月のことば

鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい
（金子みすゞ）

童謡詩人である金子みすゞさんの代表作とも言える「私と小鳥と鈴と」という作品の最後の部分が、今月の法語です。

小鳥は飛べるけれども、私がいくら両手を広げても飛べません。しかし、その小鳥も地面に降りれば、私ほど速くは走れないということになります。また、鈴を振ればきれいな音が出ますが、私が身体をゆすっても全く音は出ません。しかし、私はたくさんの唄を知っていますが、鈴は一種類の音色しか出すことができません。それぞれが全然違います。しかし、違っているけれども、それぞれがそのままで、かけがえのない尊い存在なんだと知らされます。命という観点で言えば、生きとし生けるものすべてが精一杯その命を輝かせており、それぞれの命がそれぞれの色で光っているということを、教えていてくれると思います。

今月のことばは、それぞれの命が、それぞれの色で精一杯輝いており、その色をそのまま認めていく世界を表現していると思います。一つひとつの命が、そのままに、あるがままに認め合うことのできる世界を教えてくれます。それはそのまま、阿弥陀さまの慈しみに満ちた温かなまなざしが根底にあるからではないでしょうか。ところが、私たちは常に比較してしまいます。比べてしまいます。一切比べる必要などなく、そのまま、あるがままを尊び、受けとめ、認め合っていく世界が、阿弥陀さまのお慈悲から流れ出ているのだと思います。そしてそのまなざしは、無機質な鈴というものにまで命の息吹を認めていくのでしょう。

（本願寺出版社刊「大乗」誌より転載）

仏教用語豆辞典

くしゃみ

かぜの季節です。くしゃみをすると、「おや、かぜですか。お大事に」などといわれそうです。

くしゃみは「クシャン」とするからだと思っていましたが、おもしろい話があったので紹介しましょう。

ある時、お釈迦さまがくしゃみをしました。すると、弟子たちが一斉に「クサンメ」と唱えて、師の健康を願ったということです。何ともほほえましい話が仏典に書かれていました。

「クサンメ」は、古代インド語で「長寿」という意味です。インドでは、くしゃみをすると命が縮まるといって、「クサンメ」と唱える風習があったといいますから、これは長寿を祈る呪文だったのかも知れませんね。

このクサンメは「休息万命」（くそくまんめい）「休息万病」と音写されています。これを早口で何度も言ってごらんなさい。クサメになりませんか。くしゃみはクサメから転訛（てんか）したものだそうです。

「一ほめられ、二そしられ、三わらわれ、四かぜひく」と、古老から教えられましたとにかく、お大事にしてください。

（本願寺出版社発行　辻本敬順著
「仏教用語豆辞典一〇〇パートⅡ」から）

金光寺よろずコーナー

先月２３日だったと思います。、境内の草引きをしていると、大石の内の鮎川稔さんが金光寺前の県道をバイクで通過中、私に気づかれ、バイクを留めて話しかけてこられました。

一枚の写真を手に、「祇園山山開きの準備に日曜日（２１日）行ったら、こんな写真が撮れた」とおっしゃいます。写真を見せていただくとあけぼのつつじと祇園山山頂の樹氷が写っているではないですか。上掲の写真がそれです。５？年生きてきましたが、こんな風景は初めてでした。表紙に使おうと思ったのですが、写真をさらに写してとなると状態があまくなるので、本欄での紹介になりました。

ホームページ開いてます。
URL　http：//konkhoji.jp/
５月７日現在　入室者数　２８，７５５人

住職ひとりごと

季節はずれの風邪をひきました。坊守曰く「一年に一回、引いても二回なのになぜこの時期なっちゃろ」。というのも、五月四日に叔父の米寿、叔母の傘寿のお祝いをするため、慌ただしい日々を過ごしている頃だったからです。当日は何とか風邪も治まったのですが、主役の一人が緊急入院をし、主役一人が不在の状況でのお祝いとなりました。▼三月号の寺報発行から四月号の寺報発行までにホームページに約七千人の入室がありました。そして、四月号から今月号発行までに約六千人の入室。以前はひと月で二千人ほどの入室でしたので、とても不思議です。もちろん、見ていただくためにホームページを開いているのだから、入室が多いのはうれしいのですが！▼今年は田植えが遅いような気がします。天候不順というか気温が例年よりも低い日が続いたためでしょうか。でも、だんだん、カエルの鳴き声が大きくなり始めました。早く、例年のような暖かさになって欲しいですね。

（住職　松井卓郎）

教行信証　2

今月も先月に続き、「一味」（二〇一三年春の号）梯實圓和上の親鸞聖人のご著作①『顕浄土真実教行証文類』を紹介します。

親鸞聖人のご著作①
『顕浄土真実教行証文類』六巻
梯　實圓

（先月号に続く）「何時、何処で、誰が、どんな心境で称えていてもそこに聞こえてくる南無阿弥陀仏は、阿弥陀仏が直に私に救いを告げる如来のみ言葉（本願招喚の勅命）であると聞きなさい」と言われるのです。そのように聞き受けていることを「信心」というのです。「助ける」という仰せを、仰せの通りに聞き受ければ「必ず助かる」という信心になるからです。

このように「真実の教」によって「真実の行（南無阿弥陀仏）」を、往生成仏の大道と疑いなく受け容れた「信心」の有様と、その徳用を明らかにされるのが次の「信文類」です。そこには信心は決して人間の想いではなく、如来より回向された心であって、その本体は「大智大悲の仏心」であり、「大菩提心」であるから、最高の悟りの因となるという「信心正因」の道理が顕されます。こうして本願を信受するものは、即座に阿弥陀仏の大悲智慧の光明のなかに摂め取られ、護りつづけられますから、凡夫の身でありながら、必ず仏になることが決定した聖者の仲間である「正定聚」の位に入れしめられるといわれます。

すでに現生において、正定聚の位に安住せしめられた人は、この世を終わると同時に、阿弥陀仏と同じ大智大悲を完成し、悟りの境界である真実の浄土（報土）に往生して仏陀にならせていただくという往相の「証果」を完成し、直ちに大悲心を起こして、迷っている人々を救済する「還相のはたらき」をするようになると明かされるのが、「証文類」でした。次いで、この往相・還相の回向が、そこから出て、そこへ帰ってくる真実の如来・浄土の世界を顕すために「真仏土文類」が説かれています。阿弥陀仏の救済体系である往還二種の回向は、浄土から顕れて、浄土へ帰って行くはたらきだったのです。

こうして真実の教えを体系的に顕されたあと、最後に凡夫の我欲に乗じて、真実に背く「邪偽の宗教（外教）」に迷わされないように誡め、とりわけ人々を真実の教えへと導き育てる教育的手段として仏陀が仮に設けられた「方便の教え（聖道門・要門・真門）」のあることを広く説き示されます。それが「方便化身土文類」でした。

こうして「教行証文類」は、教・行・信・証・真仏土・方便化身土の六巻に分けて真実の宗教と方便の宗教と邪偽の宗教とを体系的に明らかにするという空前のスケールで説かれた聖典でした。浄土真宗の立教開宗の根本聖典（本典）でした。

なお「行文類」の最後に「正信念仏偈」（「正信偈」）と呼ばれる六十行百二十句の詩（偈文）が置かれています。それは「本願力回向の行信」を中心に「教行証文類」の法義のすべてを要約し讃詠する深遠な教義詩でした。

以上、ふた月にわたり、梯和上のお示しを掲載しました。

第１４３号　　慧　光　　２０１３（平成２５）年　５月１０日

法語の世界

《原　文》

法敬申され候ふと云々。人寄合ひ、雑談ありしなかばに、ある人ふと座敷を立たれ候ふ。上人いかにと仰せければ、一大事の急用ありとて立たれけり。その後、先日はいかにふと立たれ候ふやと問ひければ、申され候ふ。仏法の物語、約束申したるあひだ、あるもあられずしてまかりたち候ふよし申され候ふ。法義にはかやうにぞ心をかけ候ふべきことなるよし申され候ふ。

（蓮如上人御一代記聞書　百五十六）

《現代語訳》

法敬坊が次のようにいわれました。「何人かの人が集まって、世間話をしている最中に、中の一人が突然、席を立った。長老格の人が、〈どうしたのか〉とお尋ねになると、〈大切な急ぎの用件がありますので〉といって、立ち去ったのである。後に、〈先日はどうして急に席を立ったのですか〉と尋ねたところ、その人は、〈仏法について話しあう約束があったので、おるにおられず席を立ったのです〉と答えた。ご法義のことは、このように心がけなければならないのである」と。

第三十四回高千穂組仏教女性の集い

期　日　六月三十日（日）　午前九時三〇分～

場　所　高千穂町自然休養村管理センター

講　師　西都市　光善寺住職
浄土真宗本願寺派布教使
福　永　充　証　師

持参品　念珠・門徒式章・経本・筆記用具

参加者の募集は金光寺仏教婦人会地区役員の方を通して行います。

仏事お休みのお知らせ

下記の日はお葬式以外の仏事は行いません。ご協力ください。

記

◎　５　月
１３日　高千穂組組会（総会）
◎　６　月
２２日・２３日終日
私用（高校用務）
２９日午後　女性の集い準備
３０日　高千穂組
仏教女性の集い
◎　７　月
２９日、３０日
私用（高校用務）
◎　８　月
２日　高千穂組仏教夏季講座
２４日～２５日
私用（大学用務・京都市）
◎　９　月
７日、８日　私用（高校用務）